

「特色ある共同利用・共同研究拠点」中間評価結果

大学名	昭和大学	研究分野	複合領域、脳科学、 基盤・社会脳科学
拠点名	発達障害研究拠点		
学長名	小出 良平		
拠点代表者	加藤 進昌		

1. 共同研究拠点の概要 ※中間評価報告書より転記

[共同研究拠点の目的]

昭和大学附属烏山病院は、まもなく創立以来90年になる精神科医療の臨床実績を背景に、過去5年間のCREST（戦略的創造研究推進事業）研究代表者である加藤進昌病院長の下で、多くの研究業績を挙げてきた。特にアスペルガー症候群を中心とする成人の自閉症スペクトラム障害（ASD）専門の外来とデイケアを立ち上げ、臨床研究の基盤となる患者集団の確保に努めた。彼らを社会参加に導き、就労援助を推進する先駆的試みは社会的な注目を浴び、多くの新聞・テレビのとりあげるところとなった（業績参照）。今では5年間の累積初診患者数は3,000名を越え、デイケア登録者は250名を数えるまでになっている。成人を対象とするASDの診断については学問的にも未成熟であり、臨床経験の積み重ねによって典型例を多数集める施設は国内的には皆無で、世界的にも稀である。昭和大学は、この臨床集積をASD研究に活かし、ひいては社会に還元する施設として平成25年6月、発達障害医療研究所の設立を決定した。本申請は、この研究資源を広く共同利用・共同研究に提供しようとするものである。

[共同研究拠点における成果及び目的の達成状況]

本研究所は昭和大学附属烏山病院と同じ施設内であり同院精神科医療の臨床実績を背景に、多くの研究成果を上げてきており、特にアスペルガー症候群を中心とする成人の自閉症スペクトラム障害専門の外来やデイケアをもとに、臨床研究の基盤となる対象者を確保し、臨床集積をすることが出来る。このような臨床集積によって典型例を多数集められる施設は、国内的には本研究所を除いて皆無である。

平成26年度は、6月に成人自閉症スペクトラム障害患者への精神科治療技法向上とショートケアプログラムの標準化に向けて、関心のあるデイケア施設に呼びかけることを目的としたキックオフミーティングを開催した。11月には、第2回成人発達障害支援研究会を昭和大学上條講堂（旗の台）において開催した。この研究会は昨年烏山病院で開催した第1回に続くもので、成人発達障害支援における支援手法を明らかにし、質の向上と啓発をめざす活動を行っている。また、共同利用・共同研究拠点の活動としては、共同研究課題の公募を行い、12件の研究課題を採択した。初年度ということもあり、具体的な成果は次年度にもちこしとなるが、共同研究の実施に向けて準備を整えた。

平成27年度は、9月に第3回成人発達障害支援研究会を昭和大学上條講堂（旗の台）において開催した。この支援研究会のテーマは「発達障害と就労」で実施し、ワークショップから始まりポスターセッション、シンポジウムおよび全体討論という構成で行われ、積極的な議論がなされ将来へ繋がる貴重な研究会となる。共同利用・共同研究拠点の活動としては、公募の共同研究も2年目に入り、当期は前年度に採択した研究課題の継続に加え、新規の研究課題も加わりようやく共同研究が軌道に乗り、各研究の情報収集・検査結果等の分析・解明が行われ、研究成果の発表も出来るようになった。今後は、この臨床集積されたデータ等を国外にも公表し、海外で成人発達障害の研究を行っている施設・研究者との交流を行い、本研究所を国際的な研究拠点とする構

想を考えている。

平成28年度は、11月に第4回成人発達障害支援研究会を昭和大学上條講堂（旗の台）において開催した。テーマは「発達障害と教育」で実施し、ワークショップ、ポスターセッション、シンポジウム及び全体討論という構成で、全国から集まった医療従事者及び関係者を対象に当研究所で開発したデイケアプログラムの研修を行い、同プログラムの標準化へのステップアップを図った。教育活動としては、発達障害に関連する講演会を毎月定例開催し、多様な分野の研究者を国内・国外から招聘し、専門的な講演や情報交換を行い、次世代研究者の育成を努めた。共同利用・共同研究拠点の活動としては、10件の研究課題を採択し、新しい人間科学分野の創出に努めた。この制度を利用して発達障害の臨床研究を行う試みもより实际的、具体的になってきている。拠点事業は、研究所が外部に開かれたものであることを担保するとともに、内部の研究者にとっても、違った視点で発達障害の病態を探る契機になっている。国際的な研究拠点としての活動は、当期は前年からの構想を実現するための準備期間とし、平成29年10月に国際シンポジウム開催の構築をした。

2. 評価結果

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献していると判断される。

（評価コメント）

研究所と同一施設内に病院を有し、精神科医療の臨床実績に基づき、成人の自閉症スペクトラム障害（ASD）をはじめとする発達障害に特化した臨床研究を推進するなど、特徴的な共同研究活動が展開されていることから、拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献していると判断される。

具体的には、成人の自閉症スペクトラム障害（ASD）専門の外来とデイケアによる臨床実績をもとに、診断や治療法に関する臨床研究や、研究用の磁気共鳴断層撮影装置や視線方向追跡装置といった脳科学に関する設備利用の学内外への開放など、共同利用・共同研究を通じた拠点運営が行われている。

今後は、外部の意見を積極的に取り入れる運営体制の強化を図るとともに、診断法や治療法の標準化に向けた取組や、研究会の活動等を通じた研究者コミュニティの拡大など、発達障害に関する研究分野を牽引し、学術研究の発展のみならず、広く社会に貢献することが期待される。